

雨に沈む

kogatamishin

ここは恐怖が
支配する町

老いも若いも
男も女も
意味がない

息を吸う度恐怖は
体中を駆け巡り
蓄積し

狂気は
止むことのない
陰鬱な雨から
皮膚にしみわたる







あいつが
気になりますか？

あいつはよく

わからない奴でね

...

私でも恐ろしいと

思うような仕事ばかり

して死に急いでるか

と思えば

生に対して人一倍

執着をもやす...

まるで...



奴を調べたこともありませんが

親も家族も友人もいない

薬もやらなければ

金の使い道だって

変わったことはない

この町の住人らしく

異様に用心深く

住み家は探れませんが...

所詮は掃きだめでもがく虫

夢も希望もなければ

今日を生きるために

生きているだけ...







この街の雨が
やまない様に

赤子にへその緒が
ついてくるように
自然に
恐怖は男に
ついて回った

恐怖に負けた者は
狂っていくしか
・・・ない

そう
男はいつも
恐怖そのものに
恐怖していた



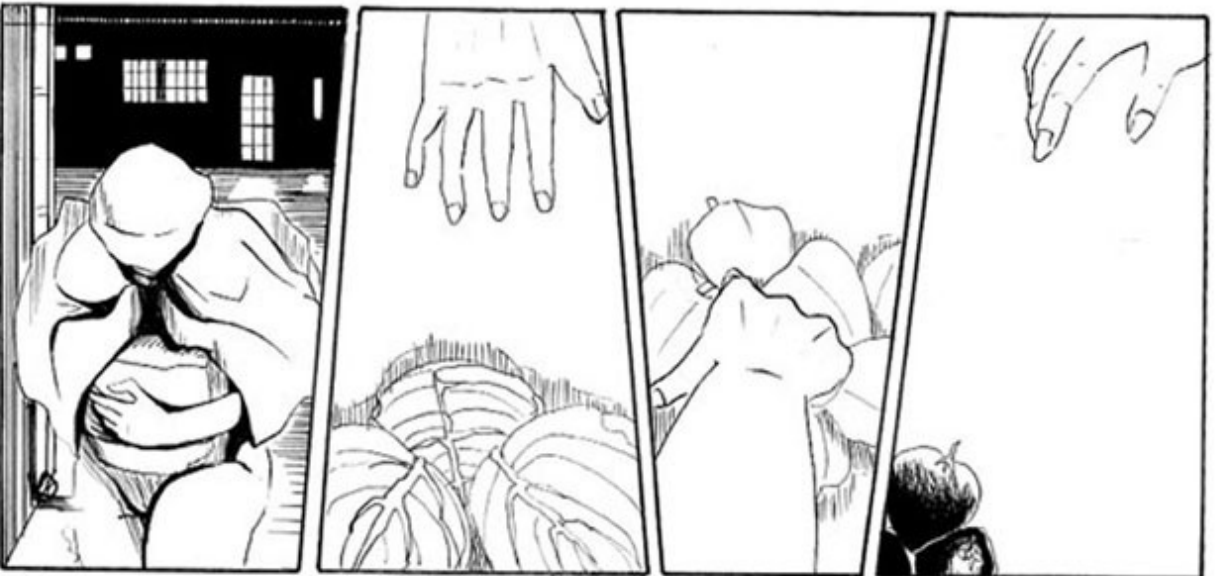
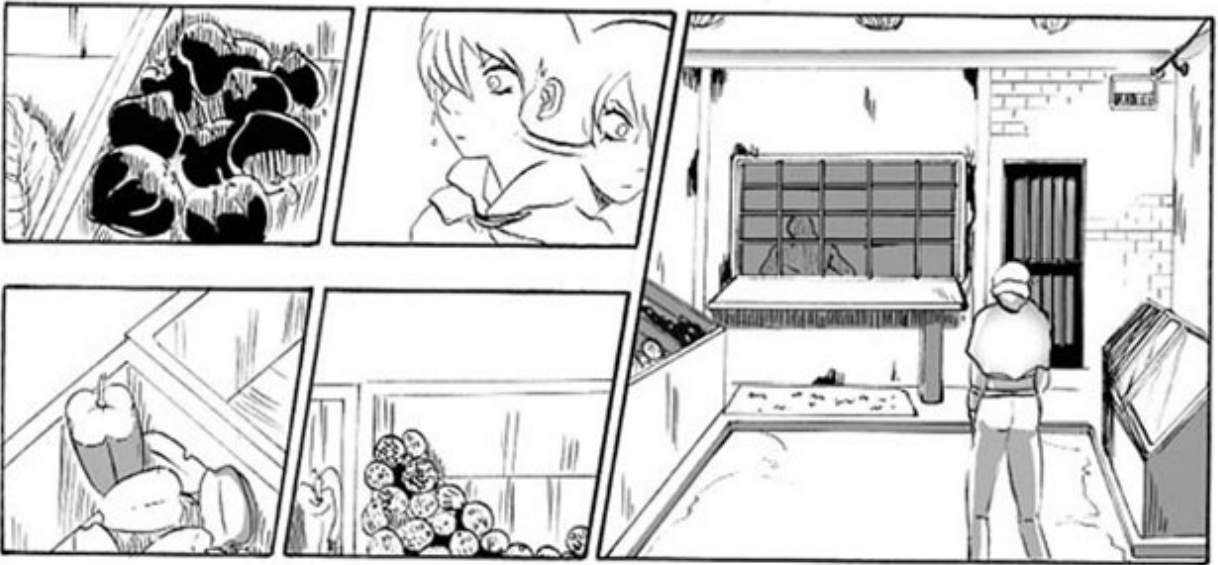
その純粋な
恐怖

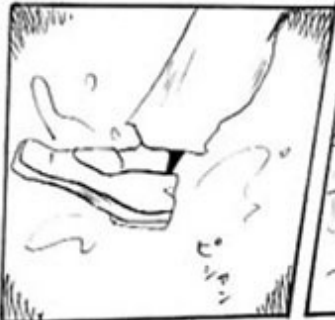
しかし「慣れ」は
恐ろしくなかった

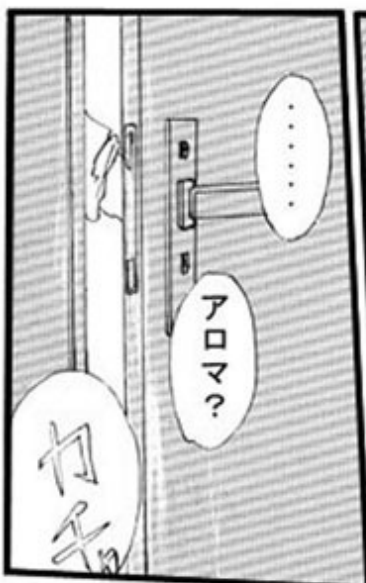
恐怖への慣れ
ではなく

恐怖に耐えることへの
慣れ

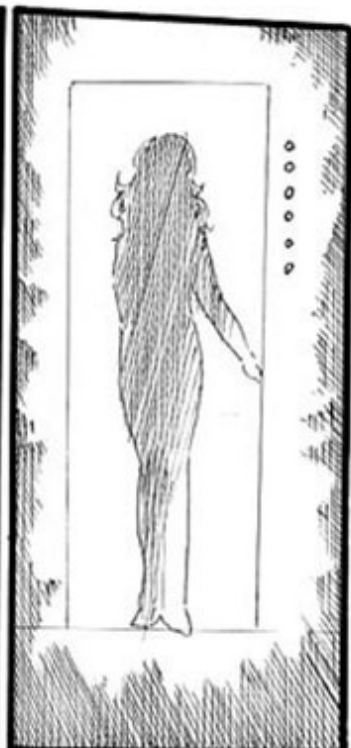


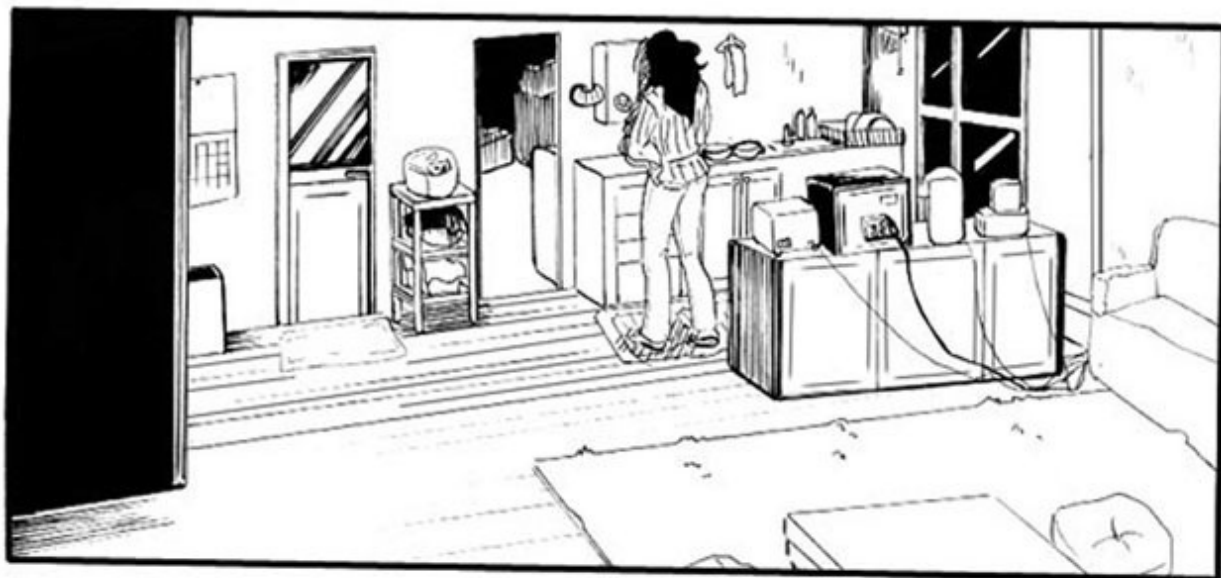






そこに一人の女





女は男を





愛していると思う



二人ですごす
とても
穏やかな時間



これが幸せなんだと
思う

とても利己的で
支配的なものだ

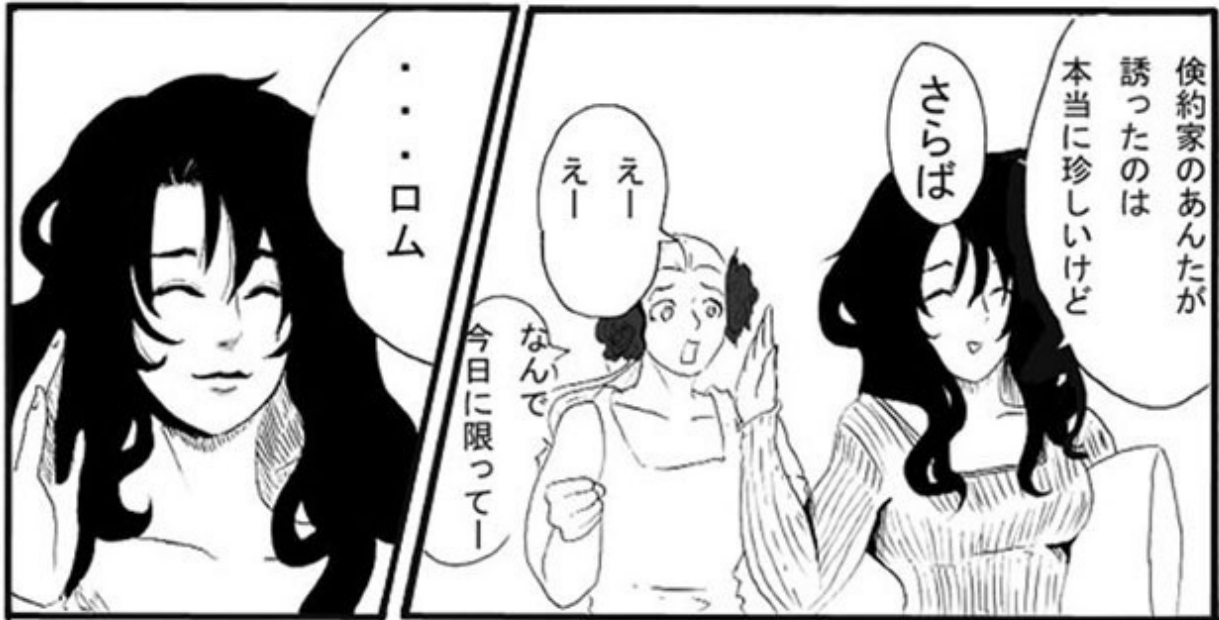
気づいていて

しかし女の
幸せは



知らないふりを
している







いいところだよ



とっても



住めば都

つてこと!

そんな大変な
ところじゃないよ

ダンスの花
いい加減
とったら?

じゃね

あ

リヨウ!
手伝えよ!



「いいところ」
だって

あいつ
イカしてんじゃ
ねえの?



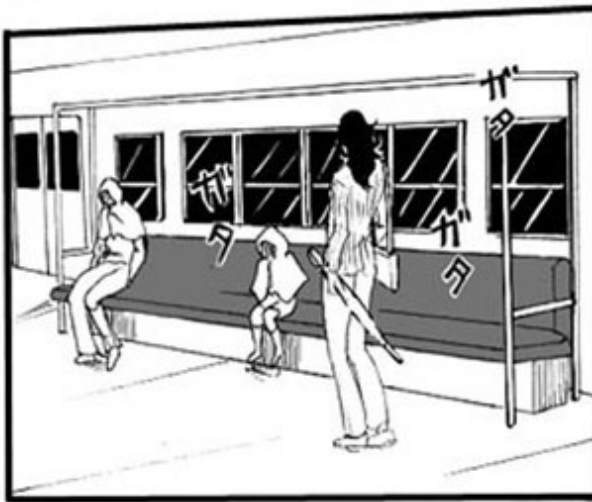
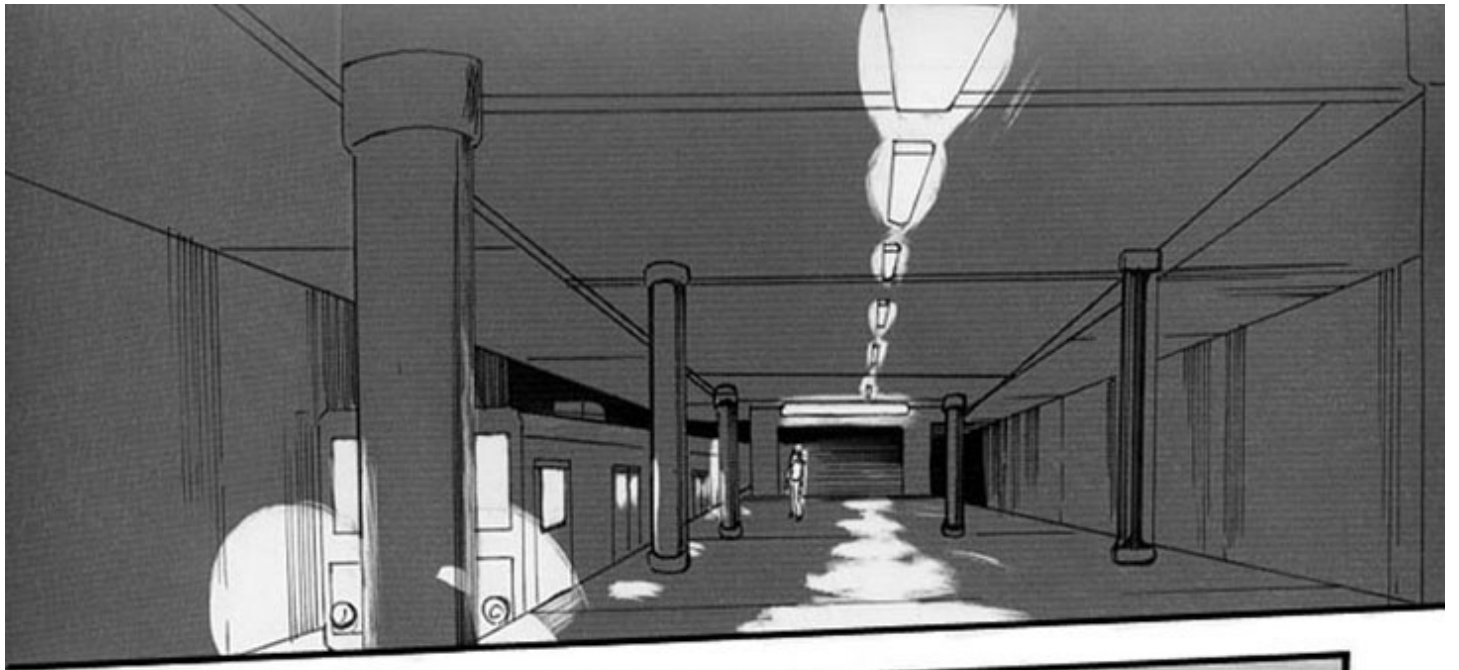
るせーな

黙ってろよ!
てめーロムのこと
よくシラネーだろ



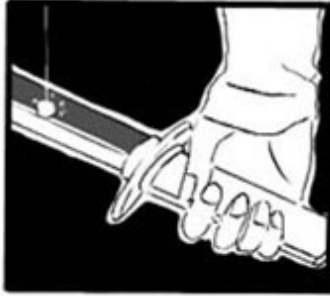
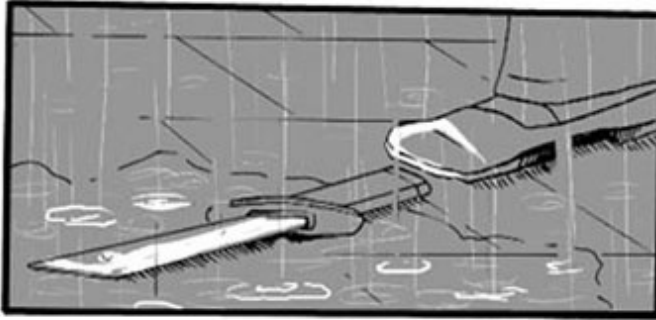
あーあいつ
工学部のロムだろ?

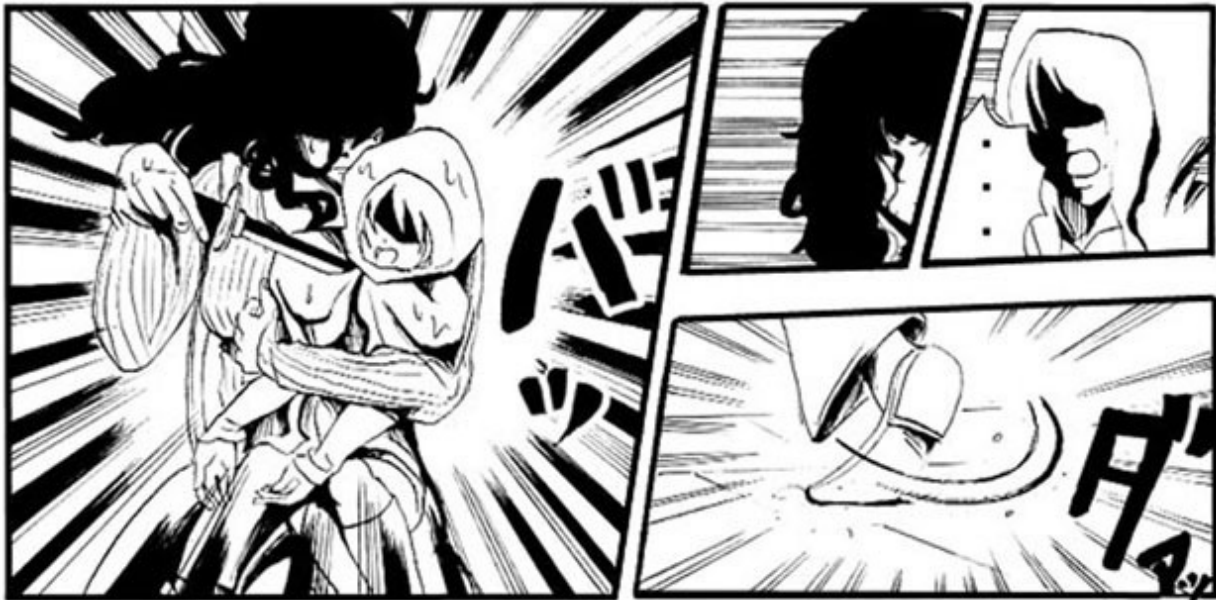
















まさにあなたは
その通りよね

・・・そ



この町では
毎日生きるのに精一杯で

傷つけ奪い合うのは
日常茶飯事
誰かを騙してパンを得ても
明日に何か
あるわけでもない



その何が
いけないの？

ただ生きようとする
何がいけないの？



そんなの
余裕も金もある奴の
言うことだわ

ただ生きることが
難しい私にこれ以上
何ができるっていうの？

私・・・
愚図なもの・・・
今だって
この人が
いなきゃ
何もできない



ただ生きているのは
動物と一緒にだもの
人間は自分の幸せを
叶えるため生きる





俺が殴られたのに
何トロトロしてやがる！

あ、あああ
……

さっさと
ぶっ殺せ
この愚図！

だ、だって
ソラが……

ソラだあ？



捕まるのが悪いんだよ！
気にせずやっちまえ！

自分の事も
ロクに
出来ねえくせに
何人のこと
心配なんて
してやがる！

いいか？
あいつはお前に似て
愚図だから
捕まったんだ
お前のせい
なんだよ！



まったく俺が
こんなに頑張ってるのに
お前らは足ばかり
引っ張りやがって

グ

お前らみたいな奴らは
俺がいない……

と

ドツ



物盗りの女の
心には

「どうして今まで
こうしなかったのだろう
というすっきりした
気持ちがあった

自分の恐怖は
夫だったのだ

そして今は
恐怖を克服した

とても幸せな気分だ



「勇気」を与えてくれた
この見知らぬ女に
感謝の気持ちさえ覚えた

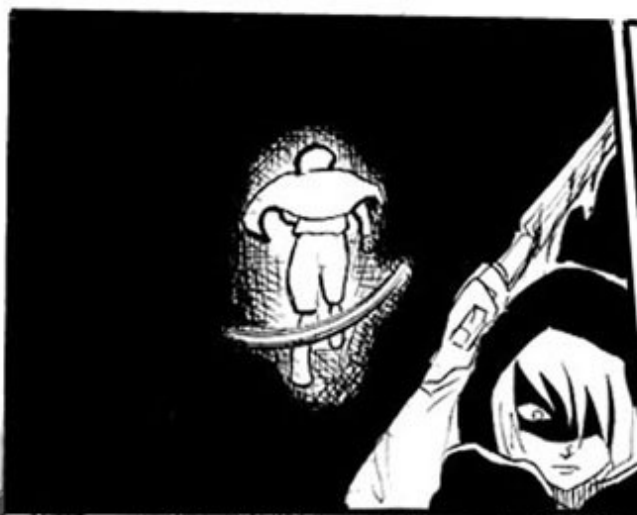
ママ ママ ママ ママ

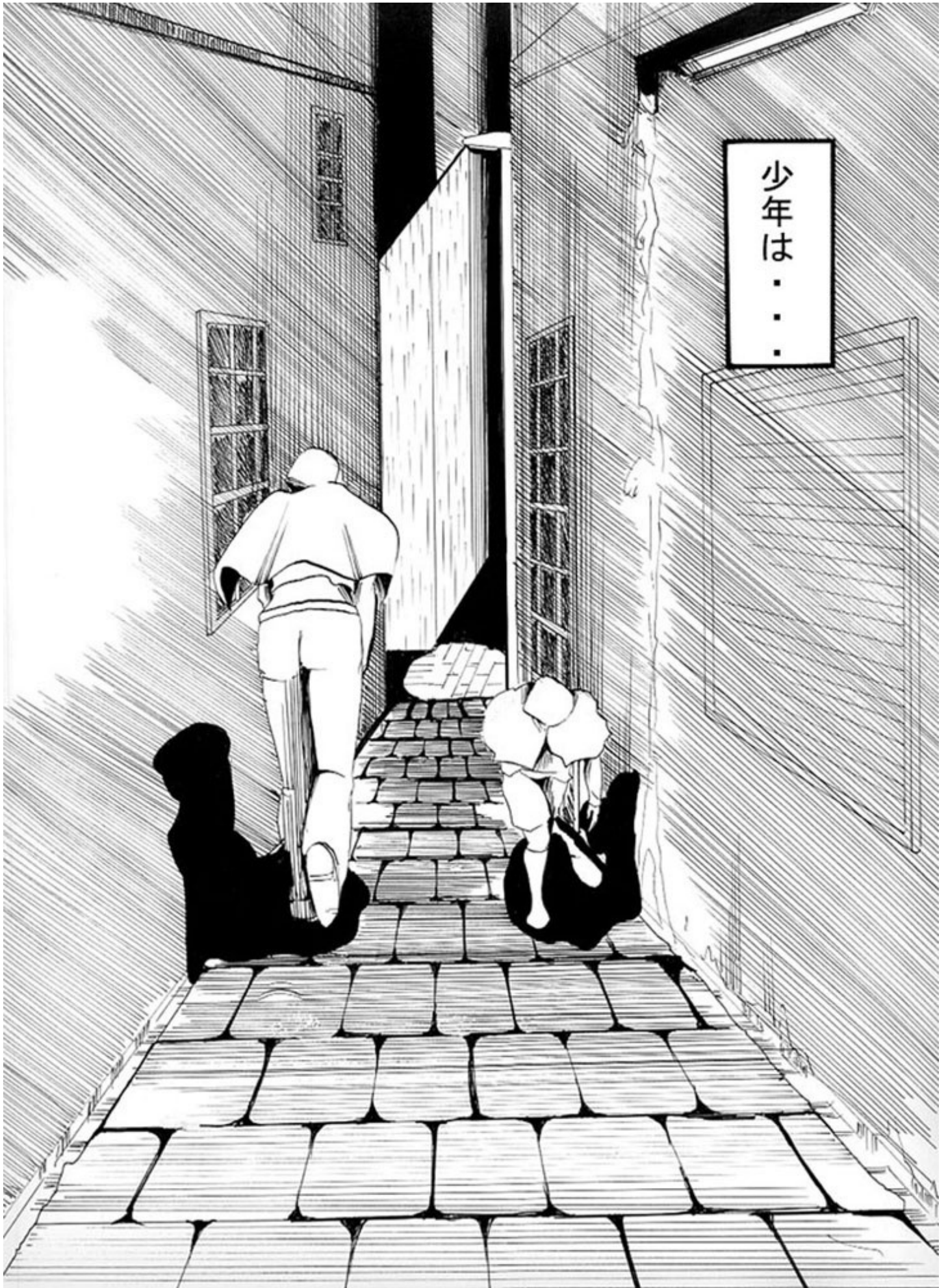


物盗りの女の心にもう子供のことは
ない









少年は・
・
・





自分の目に
そっくりだと
思った



ロムに
出会う前の
自分の目に



ギラギラと
不気味に光り
まるで野生の
獣の様で

いつも誰かの
食い物にされる
事に怯えている

そのくせ自分の
罪には鈍感


次第に自分と
他人の罪の境界が
無くなって

麻痺していく
昨日殺されたのは
あいつだったのか
それとも自分だったのか




安心もないから
不安もない


この恐怖に
支配された町で
恐怖の支配に
抗う自分に
自信さえ生まれた



いつかこの恐怖を
乗り越えられると



しかし



女に
出会った



女は

不思議だった

女と居ると

今までにない

気持になる



今まで経験したこともないし

誰も教えてくれなかったが

その気持ちは

「安心」なのだと思った

ひどく幸せで
涙が出そうだった



もし神という言葉を知っていたなら
神に救われるような
気持だといったかもしれない

だがそれは
同時に



男から
立ち向かう
力を奪った



『安らぎ』
という麻薬に
侵され



浮きも沈みもしない
重い沼のような
生活を送る

だから男は
女を憎む

甘い底なし沼のような
生活を

やさしい家を

温かい食事を

心地よい寝床を

それを与える女を

自分を弱くした女を

いつだって

殺したくなる



今でも思うのだ
あの日——

あの時
あの場所で
女を殺していれば



私が魔法を使えるって
言ったらどうする？

女は



デンパだと
思う
あ、前からか
アハハ

まあまあ
聞いてよ



少年は
差しのべられた
手を取ることは
なかった

これからも
二度と
ないのだろう

でも男は
それでいいのだと
思った

それはね
とつても
ロマンチックなの



世界中で
私だけが
使えて
彼にしか
効かない

私と居る時だけ
彼は心が
「安らぐ」の

そういうの

素敵だと
思わない？

女は

「見せかけの
優しさ」の

かたまり
だった

それは
言い換えれば

え？
例えばの話よ

心がない

利己的で
いつだって

良心もない

そして
本当に
恐ろしいのは

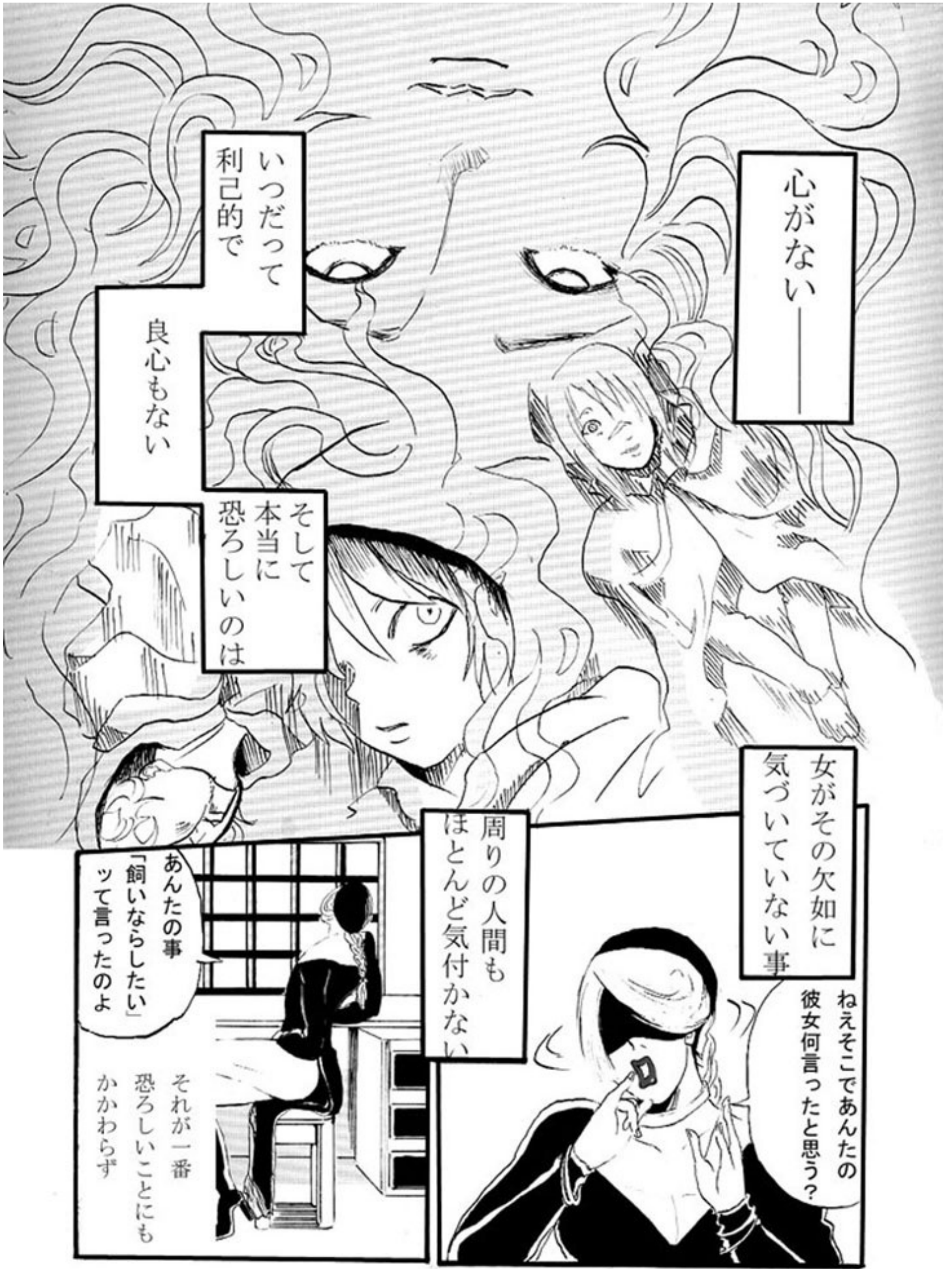
女がその欠如に
気づいていない事

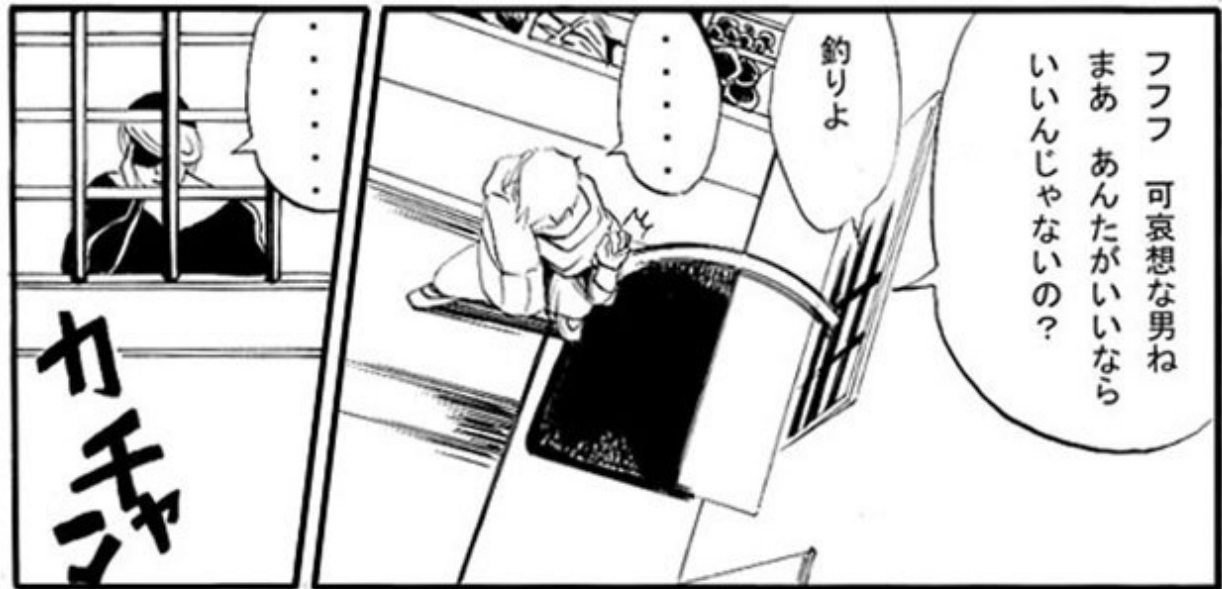
周りの人間も
ほとんど気付かない

ねえそこであなたの
彼女何言ったと思う？

あなたの事
「飼いたい」
って言ったのよ

それが一番
恐ろしいことにも
かわらな







そう

男は今日も
雨の中を
彷徨い

恐怖に打ち勝とうと
まっすぐ前を見据える



女は彷徨う男が
自分の元へと
帰るのを待つ

その支配に
不安や恐怖が
入りこむ術はない



この広い町の
中で

なんて
ちっぽけな話

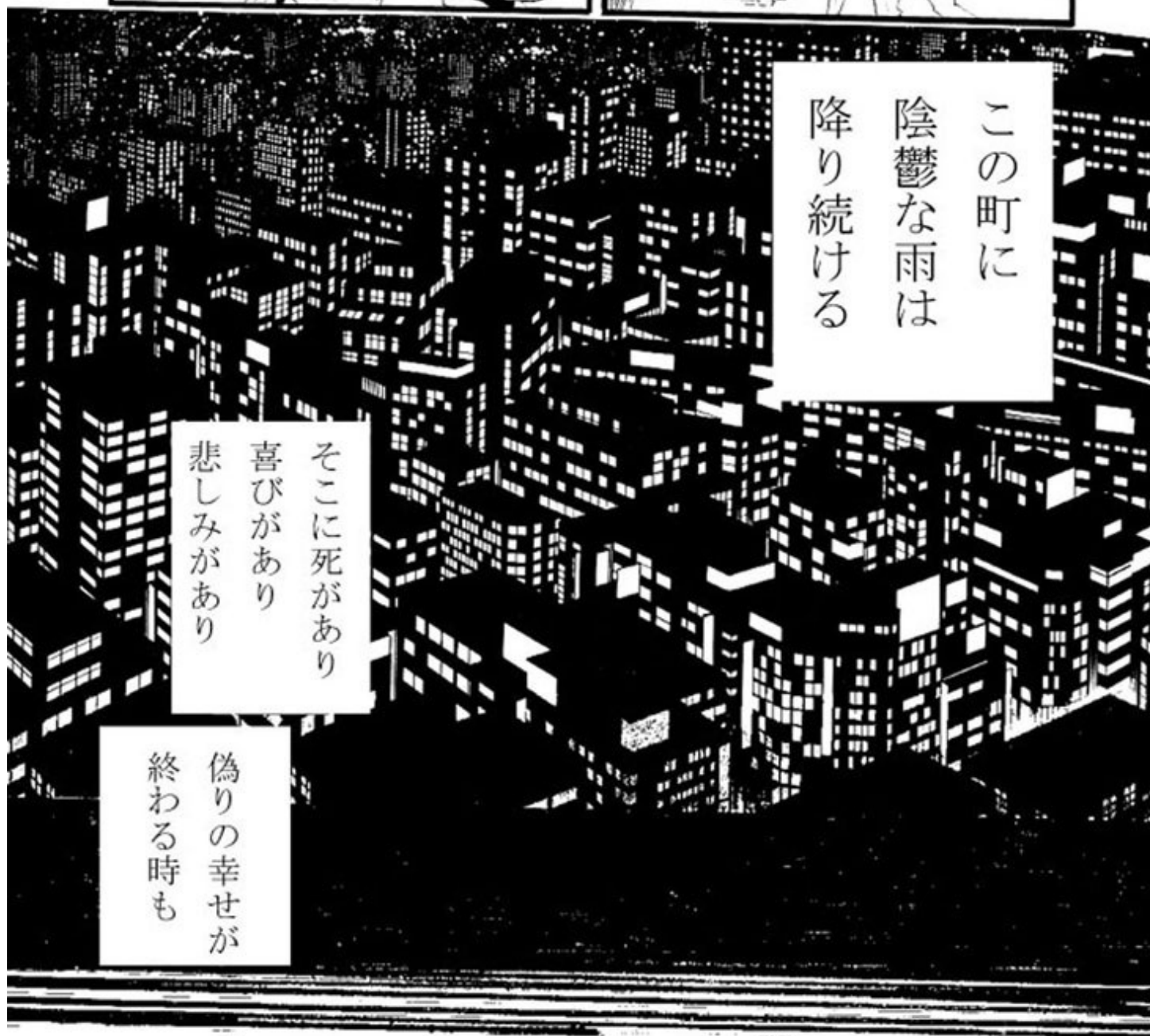


二人がこれから
どうなるか

それは
わからない

この町では
別れと死は
日常なのだから

ひとつだけ確かな
事は一つ――



この町に
陰鬱な雨は
降り続ける

そこに死があり
喜びがあり
悲しみがあり

偽りの幸せが
終わる時も

ずりぞ